

救いに至るローマ書の道（4）告白がもたらす恵み

ローマ 10:9, 10

1. 十字架と復活

ローマ 10:9 は、まず、「神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださった」と言って、神の救いの力は、イエスの十字架と復活にあると教えています。十字架はキリスト教のシンボルで、イエスが十字架で死なれたことは、誰もが知っています。しかし、なぜ、何のためにイエスが十字架で死なれたのかを知る人は少ないのです。福音書はそれを教えるために書かれ、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書のどれもが、四分の一以上のページを使って、イエスの十字架と復活を描いています。それで、福音のメッセージは「十字架のことば」コリント第一 1:18 と呼ばれ、また、福音を語る人々は「復活の証人」と呼ばれたのです。

イエスをご自分のことを聖書が預言し、約束している救い主であると主張されました。それを数々の奇蹟によって証明されたのですが、当時のユダヤの指導者たちはイエスを救い主として信じようとはしませんでした。逆に、イエスを亡き者にしようとしました。彼らは宗教裁判でイエスに死刑判決をくだしました。しかしそれは完全にでっちあげの冤罪でした。しかもユダヤの宗教裁判では人を十字架につけることはできません。十字架刑はローマ帝国にとって反逆罪などの重罪を犯した者が受けるものです。それで、ユダヤ人達はイエスをローマ総督のもとに連れていきました。ところがローマ総督ポンテオ・ピラトはイエスに何の罪も認めることができませんでした。結局、ピラトはイエスを罪の刑罰としてではなく、人々の声に押し切られてイエスを十字架につけることを許したのです。このようなことから、イエスは宗教上のトラブルや政治的な思惑に巻き込まれ、不幸が重なって世を去ったのだと多くの人が考えるようになりました。

しかし、事実は違います。イエスは十字架を避ける力を持っていました。反対者たちや政治の力に屈服したのではありません。そのようなものがイエスを十字架に追いやったわけではないのです。イエスをご自分の意志で十字架に向かわれたのです。その理由はただ一つ私たちの罪をご自分の身に背負い、それによって私たちの罪を赦すためでした。

イエスの身代わりの死は、イエスが世に来られる千数百年前に、すでに預言され、具体的に示されていました。出エジプトのとき、「過越の小羊」が屠られ、それによってイスラエルはエジプトの奴隷から救い出されましたが、神はそのとき、すべての人を罪の奴隷から救い出す「神の小羊」を約束しておられました。家のかもと門柱に小羊の血を塗ってある家だけは災いから守られ、神は過ぎ越されたのです。バプテスマのヨハネはイエスを指さして、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」ヨハネ 1:29 と叫びました。そして、その通りイエスは、過越の祭のときに死なれたのです。イエスが来られる 800 年前、イザヤは救い主について「彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた」と預言し、それは十字架によって、そのまま成就しています。イエスは全世界の人々のために、その血を流してくださいました。私たちはこの血によって罪をおおわれ、赦され、救われるのです。

イエスは十字架の上で死なれました。その死は、何人もの犯罪人を処刑してきたローマ兵によって確認されています。彼らが間違えるはずはありません。イエスの遺体は弟子たちによって葬られました。彼らもイエスの死を確認しています。イエスの死は疑う余地のないものです。

復活とは、死にかけていたが息を吹き返したということではありません。臨死体験ではないのです。イエスは完全に死なれましたが、ご自分の死によって、「死」そのものを死なせ、死に勝利して復活されたのです。そのようなことは歴史の中で一度もなかったことです。人類の歴史は、人が生まれては死ぬとい

う繰り返してました。しかし、キリストにある者は違います。イエス・キリストが復活されたように、やがて栄光のからだに復活するのです。罪からの救いを与えてくださったイエスは、罪の結果である死からの救いをも与えてくださるのです。そしてイエスが復活されたのは、私たちの復活のさきがけとなるためであり、それを保証するためでした。そればかりでなく、イエスの復活のいのちは、信じる者のうちに今、働いて、信じる者を新しい存在にし、地上の人生を力強く生き抜く力を与えてくれるのです。イエス・キリストの十字架と復活、ここに救いがあります。キリストの十字架と復活は励ましと慰めの言葉ではありません。信じる者を生かす力そのものなのです。

2. 信仰

ある教会のイースターの案内に「イエス・キリストは十字架から三日目によみがえったと言われています」と書いてありました。何か他人事のような書き方です。「キリストは…よみがえったと言われています」ではなく、「キリストは…よみがえりました」と書くべきではないでしょうか。私たちは復活の事実を信じればこそイースターを祝い、毎週日曜日、イエスの復活の日を記念して礼拝に集まり、祝っているのではないのでしょうか。キリスト者の信仰は何となくではなく確かな事実に基づいているのです。使徒パウロは「そして、キリストが復活されなかったのなら、私たちの宣教は実質のないものになり、あなたがたの信仰も実質のないものになるのです」コリント第一 15:14 とまで言っています。信仰の土台は歴史の事実です。もし、キリストの十字架や復活がたんなる物語で事実でないなら、そこにいくら意味付けをしても、私たちに救いはありません。パウロはこうも言っています。「そして、もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今なお、自分の罪の中にいます。…もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で、一番哀れな者です。」(同 15:17、19) しかし、事実、キリストは復活されたのです。イエスは復活によって、私たちの罪が十字架によって赦され、神の前に正しい者とされていることを確かなものとされたのです。

ですからローマ 10:9 は「あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われる」と告げているのです。ローマ 4:25 にも「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられた」とあります。十字架と復活を「信じる」とは、たんに十字架と復活という出来事があったことを認めるだけではありません。十字架と復活が「私たちの罪のため」であり、「私たちが義と認められるため」であることを知って、その罪の赦し、救いを受け取ることです。イエスの十字架と復活は、「イエスは十字架で死なれたそうですね。可哀そうに。でも、復活されたそうですね。それはよかったです。報われたんですね」と言って済まされるものではありません。十字架と復活の事実は、それがこの私のためであったことを知って、イエス・キリストを信じ、受け入れる信仰を私たちに求めています。十字架と復活による救いは、信仰を通して私たちのところに来るのです。私たちのところに来て、私たちのうちに働くのです。

3. 告白

ローマ 10:9-10 は信仰と共に、告白を教えています。順序としては心に信じてから口で告白するのですが、ローマ 10:9-10 は、「口で…告白し、心で…信じるなら、あなたは救われる…人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われる」と言って、心に信じることと口で告白することとを、別々のものではなく、ひとつのことと見ています。どちらが先ということではありません。心で信じるなら、それは必ず口に上るはずであり、口で告白することによって、さらに心に堅く信じることができるからです。

人にもよりますが、たいていの人は心の中にあることを黙ってはいられないものです。それが辛いことであれ、嬉しいことであれ誰かに話したいものです。誰も聞いていなくても、ついひとりつぶやいたり、することがあります。つまり私たちは心にあることは何らかの形で自然に出るものなのです。神が私の罪を赦してくださる。正しい者と認めて受け入れてくださる。神の子どもとして愛を注いでくださる。それを聞いて、知って、分かって、黙っていることはできないはず。「神さま、私の罪を赦してください。御国に受け入れてください」と心で祈るだけでなく、実際に声を出して、「イエスさま、あなたは救い主です。主です」と叫びたくなるのです。心にある信仰は、告白となって唇に上るものなのです。

しかし、どのような言葉で、信仰を言い表わせばよいのでしょうか。「告白」とは私たちの心の奥深くにあるものを正直に口で言い表す時に「告白する」と言ったりします。じつは、「告白」は、もとの言葉で「ホモロゲオー」と言い、それには「同じことを言う」という意味があります。何と同じことを言うのでしょうか。一つには自分の心の中にある思いと口に出すことと同じであるという意味です。さらに信仰者にとっては神の言葉と同じだということです。どういうことかと言いますと神の言葉が「すべての人は罪を犯した」と言うので、私たちも「私は罪を犯しました」と告白します。神の言葉が「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです」と言うので、私たちも「私を死から救い出し、永遠の命を与えてください」と願うのです。

信仰を告白する言葉は、聖書に数多くありますが、そのひとつはピリピ2:6-11です。「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。それゆえ、神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、『イエス・キリストは主である』と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」ここに「イエス・キリストは主である」という言葉がありますが、これは、信仰告白の要約の言葉です。その前後の言葉にあるように、「イエスは私たちの罪のために十字架で死なれた救い主キリストです。復活し、天に昇り、御座に着き、すべてを治めておられる主です」という意味が、「イエス・キリストは主です」という言葉に含まれています。「イエス・キリストは主です」をもっと短くしたのが「イエスは主です」という言葉です（コリント第一12:3）。今日のローマ10:9は、この一番短い告白の言葉「イエスは主です」を取り上げて、「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白するなら救われる」と言っています。クリスチャンはみな、洗礼の前に「私はイエスさまを私の救い主と信じます」と祈っているはず。そしてイエスを主としているなら同時に私はイエス・キリストにこのようにして従っていますとなるはず。そうでないと論理的におかしいですね。イエス・キリストは主です。でも私はイエスであろうと、誰であろうと指図を受けないで自分の思うように生きているとしたら、それは結局、イエスは主でも何でもないとということになります。私たちは礼拝に集まって毎週「イエスは主です」と告白し続けています。礼拝では、他の人々と一緒にひとつの心、ひとつの言葉で、共に「イエスは主です」と告白します。そして、礼拝を終えてそれぞれの場所に遣わされていくときも、「イエスは主です。わたしの主です」と告白し続けます。心に信じるものが、ことばとなり、それが証しとなり伝道となるのです。信仰の告白は、自分を救うだけではありません。その告白に触れる人々をも救います。他人の救いを願うならばまず自分自身がイエスは主であるとの信仰の告白をしっかりと語りたいと思います。この週も、その告白の力を見せていただきましょう。